



**Opera** チューリヒ歌劇場《イドメ  
ネオ》プレミエを迎えて

贅沢な4時間であった。歌劇場管弦楽団の中に存在する、古楽器を使ったアンサンブル『ラ・シンティッラ』の小回りの利く自由な発想の音楽に、編み込まれるように溶け合う歌。歌手や合唱団、エキストラ等の自然な演技と、それを支えながら、舞台上の動きの基礎を固め、品格を添えるバレエ。耳にも目にも心地がいい、これこそ総合芸術の極みと言えよう。

# Scramble Shot

アーノンクルのモーツァルトは、アクセントがきいていて、輝かしい音色で生き生きと演奏される。そこに重なる柔らかで無垢な声音が効果絶大なユリア・クライターのイリアと、新人らしさは感じさせるが、それがかえって純真な愛情を健気に語るのにふさわしいイダマンテのマリー・クロード・シャピユイ。このカップルは、小ぶりではあるが、アーノンクルの緻密な音楽を作り上げるには適役であろう。例えばイリアが、父の敵であるイダマンテを愛していると、初めて認めて口にした時に響く和音のなんと官能的だったことか。そして題名役のサイミール・ビルグはまだ30歳にもならない若さで、歌唱力も演技力も王として違和感を感じさせなかった。その3人に比べ、エレットラのエヴァ・メイは、演技やアンサンブルはさすがに上手であったが、ドラマティックな部分は吐き捨てるように歌詞を話すことでなんとか解決していたり、シュトレールやシャッシングなどを含めたアーノンクルオペラの常連は、劇中に存在感を与えているものの、今までほど生かされていなかったことを見ると、このオペラの筋書き同様、アーノンクル組の歌手達も世代交代の時なのだろうか。最後を飾るエネルギッシュな若者のパレエといい、このオペラは長老アーノンクルが若い世代に託した夢の形なのかもしれない(2月20日)。(中 東生)

